

トランスジェンダー をいきる

(17)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

リアルライフの構築に向けて

1 始めに

リアルライフ構築とは、体・書類上の性別とジェンダーの性別が不一致である場合、自己のライフスタイルをジェンダーの性別に移行させることを言う。すなわち、筆者の事例では、体・書類上の性別は女性であるが、ジェンダーの性別は男性であるため、自己のライフスタイルを女性から男性に移行させる、ということである。

自己のライフスタイルをジェンダーの性別に移行するという事は、たとえばそれまで身につけていた女性物の服や小物を男性物の服や小物に変えていく、それまで「私」という自称詞を使っていたのが、「僕」・もしくは「俺」に変えて、男言葉を使用する、名前を男性名にする、などである。

今回から3回に渡って、筆者がどのようにして女性から男性への性別移行を行ったのかについて詳述する。第1回目の今回は、リアルライフ構築の最初の段階として、女性から男性への服装や小物の移行について、視覚に障害のある筆者が、どのようにして男女の衣服を区別するのか、実際に女物の衣服や小物から男物の衣服や小物に変えていく過程で、どのような心理的变化が起きたか、また、どのようにして紳士物の衣服や小物を購入しているのか、そして現在、男物の衣服や小物を身につけることが「当たり前」の段階に至るまでになった経緯について述べてみる。

2 「家族の洗濯物」から学んだ男女の衣服の違いと、「食器洗い」から学んだ男女の食器の違い

筆者は学生のころ、学校の長期の休みになると、「女の子であることを理由に」、家の手伝いとして洗濯を任されていた。夏休みには玉のような汗をかきながら、冬休みには、凍りつきそうな手で、毎日のように洗濯物を干していた。そして、時間を決めて、洗濯物を取り込み、たたくたんすの中にしまいこんだ。

そのような一連の行為の中で、筆者は知らず知らずの内に、男女の衣服の違いに気づいた。ま

ず、同じ下着でも男女によってデザインや大きさが違うこと、生地が厚さが男物の生地は厚くて少々重いのに対し、女物の生地は薄くて軽いこと、そしてデザインにいたっては、男物はシンプル・女物はレースがついてなんとなく華やか、という具合である。同様に、シャツ・セーター・ズボンに対しても、男物は生地がしっかりしていて厚みがあるのに対し、女物は生地が薄くて男物よりは小さく、しかも襟が小さい、などである。視覚に障害のある筆者は、触覚によって男女の衣服の違いを観察していたのである。

そのうち筆者は、洗濯物を干しながら、あるいは洗濯物をたたみながら、いちいち「これは男物のパンツ、いいなあ、俺もこんなパンツ、人生で1度でいいから履いてみたい」、「これは女物のTシャツ、俺は男なのに、こんな小さくて薄っぺらなTシャツを着せられてなんだか惨めやなあ」というように、一つ一つの洗濯物に、言葉にならない感想を交えながら観察していった。2歳年上の兄の洗濯物を触ったとき、「俺、本当はこんな下着や服を着るはずなのに」と、言い知れぬ興奮と羨望が入り混じった複雑な気持ちになったことを今でも記憶している。

また、筆者は毎晩のように、「女の子であることを理由に」、食事の後片付けをやらされていた。そのとき筆者は、男物と女物の茶碗と箸の違いにも気づかされた。すなわち、男物の茶碗は女物より大きくて重い、男物の箸は、女物より長くて太い、ということである。「なぜ俺は、こんな小さな女物の茶碗で、しかもこんな短い女物の箸で、毎食の飯を食わなければならないのか」と、食器を洗うたびに情けない思いに駆られていた。

3 女性としての服装から、男性としての服装への移行

①男物の下着を購入し、身に着けたことへの罪悪感

本格的な一人暮らしを始めた1996年ごろから、筆者は男物の下着に興味を持ち、仕事の休みを利用して、遠方のスーパーで、男物の下着を購入するようになった。

帰宅後、ドキドキしながらスーパーで買った男物の下着を恐る恐る開けてみた。ブリーフ・トランクス・シャツ、、、どれもこれも柔らかな手触り。女物よりさらさらとした生地でありながら、縫い目がくっきりと出ている。その手触りにかっこよさを覚えた筆者は、顔を赤らめながら、男物の下着をたんすにしまった。そして入浴後、いったんたんすの中にしまった男物の下着のなかから、ブリーフとシャツを取り出し、それを身に着けた。

別に悪いことをしているわけではない。まして一人暮らしであるから、誰が見ているというわけでもない。しかし、体が女性である筆者の心理状態として、男物の下着を触っただけで興奮しながら身に着けたことに、筆者は罪悪感を覚えた。そこには、「隠れて男装している自己」に対する軽蔑も含まれていたのかもしれない。

②男物のカジュアルな服装が「似合う」と実感して

男物の下着を購入し、触って興奮したり、身に着けたことへの罪悪感は、知らず知らず消えていった。すると今度は、「男物のカジュアルな服装」を「をしてみたいと思うようになり、それとなく紳士服売り場に立ち寄るようになった。

視覚に障害のある筆者が、どのようにして衣服を選ぶのか。当時は、前項で詳述した洗濯物を

通じての触覚、つまり、記事の手触りが主流で、後は男性店員から色やデザインの説明を受け、試着をしながら購入した。そのような購入の仕方を繰り返しているうちに、「俺のような細井体系でも、男物の服が着れる」という自信がついてきたのか、2005年ごろからは、週に2度の仕事の休みの度に、紳士服売り場に行くようになった。そしていつの間にか、衣服のデザインと色にも興味を持ち始め、ジェンダー化された自己の男イメージのデザインと色を図式化するようになった。すなわち、黒・紺・茶・グレーなどの色で、縫い目や仕立てがしっかりしている衣服は「男」というように、視覚に障害があっても、自ら積極的に色やデザインなどをある程度指定して、男性店員と相談しながら購入する、という仕方で変化していったのである。

③スーツ・ネクタイ・革靴その他の小物

2006年になり、いよいよスーツ・ネクタイ・革靴その他の小物にも興味が沸いた。財布やバッグは、比較的身に着けやすかったものの、スーツ・ネクタイ・革靴を最初似身に着けたときは、それなりの「ハードル」を感じてしまった。(体系が細井俺が、男物のスーツを着て、ネクタイを締めて、その上革靴まで履いて、、、)と、自己のそのような姿に奇異な感覚を覚えて困惑した。

実際、女性の服装から男性の服装への移行期には、当時勤務していた鍼灸マッサージ治療院の患者さんたちから、筆者の服装に関する苦情が出ていた。また、職場の上司や同僚たちは全員視覚に障害があるにも関わらず、患者さんたちからの苦情を受けて、筆者を奇異な目で見えるようになった。さらに、男物の服装で実家に帰省したときは、(すでに髪型は短髪だったので)、両親からの小言が絶えなかった。父にいたっては、「そんな男のかっこうで帰ってくるな！」と怒鳴られた。紳士服売り場ではうきうきしながら衣服の品定めを行っている一方で、通勤時や勤務中は、冷たい視線にさらされる。家族からは小言を言われ、半ば家から追い出されそうな迫力で怒鳴られる。「移行期」とは、なんと複雑でデリケートで脆弱な期間なのか、と、筆者はつくづくと思い知らされた。

4 終わりに「私が男物の服装をし、男物の小物を身に着けるのは当たり前」

男物の下着を触って興奮し、身に着けたときに罪悪感を感じた日から早20年。「かっこいい」・「センスいいね」など、服装をほめられる機会が多くなったことで、筆者は年々メンズファッションにこだわるようになった。現在では、「男物の服装をし、男物の小物を身に着けるのは当たり前」と心底から思っている。

それでもたまには女性と見間違えられることがあるのだが、その度に、「女がこんなかっこうしとるか。あんた、ちゃんと目が見えとんか」と、人前で真正面から堂々と怒れるようになったことは嬉しい。

「服装の乱れは心の乱れ」という言葉をよく耳にする。今後、どんなに病気がちであっても、何らかの事情で、男物の衣服や小物を購入することが難しくなっても、今持っている男物の衣服や小物で、自己のメンズファッションにこだわりたい。

うしわか こうじ (立命館大学大学院先端総合学術研究科)